

北海道留辺蘂高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 71名

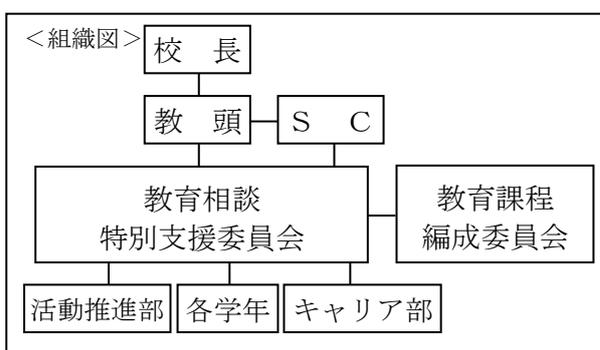
1 取組の特徴

一連の事業8年目の本校は、これまでの実践で身に付けた集団カウンセリングのスキルを活用したコミュニケーショントレーニングに積極的に取り組んでいる。

- 「ほっと」と「アセス」の併用と新入生に対しての「個別のチェックシート」による生徒理解と適応状況の把握
- 生徒のコミュニケーションスキルの傾向把握と分析、そして分析結果を活用した教育相談及びコミュニケーショントレーニングの充実と成果の検証

2 取組のねらい

- コミュニケーションスキル育成トレーニングツールの蓄積促進及び校内外の研修を通して、全教員がSGE等を実践できる体制づくり及びそのスキルを活用した教科指導を促進する。
- 「ほっと」、「アセス」の分析及び効果的な活用について研修を進め、教員のスキルアップを図る。



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月 ○担任による入学式後及びHR開きでの集団カウンセリングの実施
 ○宿泊研修におけるグループエンカウンターと他校と合同でのコミュニケーショントレーニング
 ○1、2年次生「ほっと」1回目の実施と分析
 ○1年次生集団カウンセリング
 ○「個別のチェックシート」による生徒理解</p> <p>5月 ○1年次生「アセス」1回目の実施と分析
 ○SCによる個別カウンセリングの開始
 ○2年次生外部講師によるインターンシップへ向けたSSTの実施</p> | <p>6月 ○1年次生「地元で働く人へのインタビュー」へ向けたSST実施
 ○個別SSTの開始</p> <p>9月 ○1年次生「アセス」2回目の実施と分析
 ○1年次生担任による集団カウンセリング</p> <p>1月 ○1年次生外部講師による集団カウンセリング</p> <p>2月 ○1年次生「ほっと」2回目の実施と分析
 ○2年次生「アセス」2回目の実施と分析</p> |
|--|---|

4 取組の内容

1 HR担任による集団カウンセリング

(1) ねらい

自己理解を促進するとともにコミュニケーション能力の向上を目指し、仲間との会話をより楽しくできるようにする。

(2) 内容

グループ活動を通して自分自身についての新たな気づきを得たり、仲間の良いところを互いに認め合うプログラムを実施。

(3) 成果

生徒からは「自分では気付いていないところを友だちから褒めてもらえて嬉しかった」などの声が聞かれた。



4月26日
 「ジョハリの窓」を説明中

4 取組の内容

2 外部講師による集団カウンセリング

(1) ねらい

約1年間培ってきたコミュニケーション能力の定着について検証するとともに、今後の課題を明らかにする。

(2) 内容

「コミュニケーション能力の向上」をテーマに「アドジャン」などのエクササイズを実施した。

(3) 成果

社会性を高めていくためにも、いわゆる“外部”の方に講師をお願いすることは大変効果的であることを再認識することができた。



外部講師によるコミュニケーショントレーニングの様子（1月実施）

3 各教科等での取組

少人数で授業ができる総合学科の特色を活かし、各教科や総合的な学習の時間でも積極的にSGEを導入し、人間関係づくりを意識した授業を展開している。

グループ活動やプレゼンテーション、ディスカッション等言語活動を主とし意図的に生徒がコミュニケーションを取ったり助け合いながら授業が進められるよう工夫している。

今年度は、例年以上に異年齢交流を推進しており、併せて教科横断的な授業を展開することで、異世代及び同世代とのコミュニケーション能力の育成を目指してきた。

○各教科、総合的な学習等における主な異年齢交流の内容（例）

- ・子ども文化、子どもの発達と保育・・・幼稚園訪問、園児との交流
- ・生活と福祉・・・グループホーム訪問、学校招待、施設利用者との交流
- ・介護総合演習・・・社会福祉実習
- ・課題研究英語ゼミ・・・幼稚園・小学校外国語活動の実施
- ・課題研究福祉ゼミ・・・中学校での出前授業（福祉科目）

5 現段階での成果と課題

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者は昨年度よりも減少し、不登校生徒もいない。中途退学者数は数年前と比較すると激減しているといえる。

(2) その他の指標による評価

アセスや「個別のチェックシート」（1年次生）を併用することで多角的な生徒理解につながる。また、個別面談等で活用した結果、生徒にとっての自己理解の一助となった。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

近年の本校における「ほっと」の結果を総じてみると、意見を言ったり集団をまとめる力は弱い、高校生活のルールを守りながら自分らしく新しい環境に適応していこうとする意欲は向上している。

(4) 生徒の変容した姿

生徒はコミュニケーションの重要性を感じている。これまで継続して取り組んでいる生徒会が運営して行う「Noケータイ day」や、縦割りのチーム編成でスポーツや文化的行事を楽しむ「生徒会企画」などの年次の枠を超えた交流や今年度より実施した地域の関係機関と連携した学校祭を通して、コミュニケーションスキルがさらに高まることが期待できる。

2 課題

○ 入学後、早期のコミュニケーションスキル育成を重点的に行ってきたが、3年間を見通した系統的な取組が実施できるよう計画性を持つことが必要である。

○ コミュニケーションスキルを養うためにも、ボランティア活動と部活動の活性化を図ることが必要である。

3 次年度に向けて

「ほっと」や「アセス」の効果、活用方法等について教職員間での共通理解が図られていない。校内研修を企画し、アセスメントの重要性、有用性について理解を広めていきたい。

北海道雄武高等学校

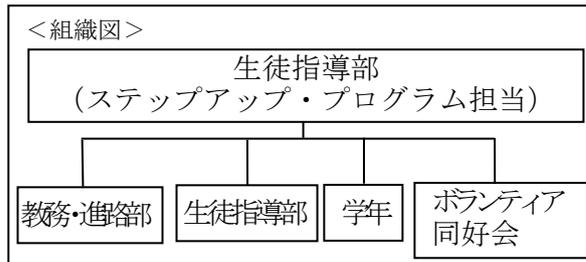
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 67名

1 取組の特徴

ピア・サポートトレーニングをHRや全校生徒、ボランティア同好会の活動などに取り入れ、校内外におけるサポート活動や小・中学生との交流を通して、より良い環境づくりに取り組んでいる。また、3年生が1年生へトレーニングを行うことによって、3年生のセルフエスティームの向上とトレーニングスキルの定着を図っている。

2 取組のねらい

ソーシャルスキルトレーニングを通して、自尊感情を高め、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指すとともに、いじめ、不登校や中途退学の未然防止と自殺予防に努める。



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 ピア・サポート研修会 (年間11回実施)
 仲間理解とコミュニケーション (2学年)
 3年生による仲間理解とピア・サポート (1学年)
 自己理解と自己分析 (3学年)</p> <p>5月 3年生による話の聴き方トレーニング (1学年)
 教育実習生によるインターンシップに向けた問題解決
 (2・3学年合同)
 生徒会主導による対立の解消 (全学年)
 「アセス」「ほっと」実施・分析 (全学年)</p> <p>6月 集団生活と人間関係づくり (宿泊研修)
 3年生による自己理解 (1学年)
 3年生による問題解決方法を知る (1学年)
 集団面接における傾聴と表現 (3学年)
 対立の解消 (3学年)
 カウンセラーとの個別面談 (希望者)
 講師による対話とリフレーミング (全学年)</p> <p>7月 カウンセラーとの個別面談 (希望者)
 講師による「快・不快」コミュニケーション
 (全学年合同)
 3年生による対立の解消方法を知る(1学年)</p> | <p>8月 カウンセラーとの個別面談 (希望者)
 講師によるストローク学習 (1学年)
 講師による進路選択と心の気付き(2学年)
 講師によるセルフコントロール(3学年)</p> <p>9月 「ほっと」の校内研修 (教員)
 小・高校交流会 (小3・4、高1)
 カウンセラーとの個別面談 (希望者)
 「アセス」「ほっと」実施・分析(全学年)</p> <p>10月 ライフプログラミング (3学年)
 価値観と他者理解 (3学年)
 講師によるストローク学習 (1学年)
 講師による将来を考える (2学年)
 講師による自己理解 (3学年)
 カウンセラーとの個別面談 (希望者)</p> <p>11月 アンガーマネージメント (3学年)
 カウンセラーとの個別面談 (希望者)
 講師による肯定的ストローク (1学年)
 講師による交流分析 (3学年)</p> <p>2月 講師による人間関係づくり (1・2学年)
 「アセス」「ほっと」実施・分析 (1・2学年)
 アサーション (1学年)</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 生徒理解 (教員研修)
- (1) ねらい
 「ほっと」の基礎・基本的な仕組み及び活用についての研修を行い、今後のクラス運営や生徒支援、将来担任を持ったときの生徒理解の手法に繋げるようにする。
 - (2) 対象
 教職員
 - (3) 内容
 生徒のコミュニケーションスキルの状況を把握し、生徒の特徴や課題を見つけ、教科で取り組めるアイデアを出し合った。
 - (4) 成果
 「ほっと」の共通認識と課題や取り組みのアイデアを共有することができた。

2 生徒会主催による他学年とのコミュニケーション

(1) ねらい

全校生徒が対立の解消法を理解し、学校祭の話し合いをすることで、異学年との交流が深まるとともに、対立が起きたときの対応を意識しながら話し合うことができる。

(2) 対象

全校生徒

(3) 内容

他学年と挨拶をしながら、ジャンケンをして勝ったら名前をシートに書いて9マスを埋める交流。その後、対立解消のための『アルの法則』を確認してから、初めて学校祭で行うミュージカルのメリット、デメリットを出し合い、どうしたらデメリットを前向きに考えられるかの意見交換をした。

(4) 成果

ジャンケンで親睦を深め、『アルの法則』を再確認することによって、話し合いながら互いに意見が出しやすくなり、学校祭に向けての思いや心構えが深まった。

3 学年によるピア・サポートトレーニング（総合的な学習の時間）

(1) ねらい

コミュニケーションにおける大切なスキルを身に付けながら、自己理解や他者理解をして、ピア・サポートへの理解を深め、人間関係の再構築を図る。

(2) 対象

各学年

(3) 内容

1学年は3学年代表による「仲間理解」「話の聴き方」「自己理解」「問題解決」「対立の解消」のトレーニングを行った。2学年は担任による「仲間理解とコミュニケーション」、3学年は担任による「エゴグラムとアサーティブ」「傾聴と表現」「対立の解消」「ライフプログラミング」「価値観と他者理解」「アンガーマネジメント」のトレーニングを行った。

(4) 成果

自己理解及び仲間理解が深まり、良好な人間関係の在り方を築くスキルの学習をすることができた。また、3年生が1年生のトレーニングを行うことによって、復習や自尊感情の高まりと下級生へのサポート意識が高まり、指導の難しさや立場への理解が深まった。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

H27年度入学生は1年次2名の進路変更があったが、2・3年次での進路変更はない。

(2) その他の指標による評価

部活動の中途退部者は、昨年度9名であったが今年度は1名であった。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

2・3年生の偏差値及び得点に高まりが生じ、3学年は3年間で最も高くなった。

(4) 生徒の変容した姿

日頃意識していないコミュニケーションのあり方や自他理解を深め、生徒会や部活動、教科でのアクティブラーニングにも活かすことができるようになってきた。

2 課題

○自分の考えを伝え聴く、コミュニケーションを意識した学校教育活動の実施。

○「ほっと」や「いじめ」調査などによる学級や困り感の把握と対応。

○学年、特別支援や教育相談委員会との連携による個別対応と面談。

3 次年度に向けて

自分の考えを伝え聴く、コミュニケーションを意識した教育の充実と、学年と特別支援や教育相談委員会との連携による個別対応と面談を行う。

北海道本別高等学校

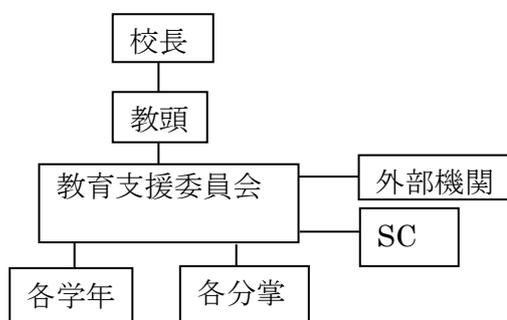
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 117名

1 取組の特徴

- 1 コミュニケーションスキル学習を3年間を通じて系統立てて実施
- 2 特別支援教育の研究と関連させて、障がい理解を深めさせ、多様な個性を認め合える集団づくり
- 3 スクールカウンセラーによる個別相談の実施
- 4 「ほっと」を活用した教育相談の実施

2 取組のねらい

本校は、不登校・中途退学者も少なく落ち着いた学校である。しかし生徒の中には他者とのコミュニケーションに困難さがあつたり、家庭環境から心の不安定さを訴えたりする生徒が一定数いる。そういった生徒に対し、個別的な支援策としてのスクールカウンセラーの活用や、全体的な取組としてコミュニケーションスキル学習を行い、コミュニケーション能力の向上と心理的な安定を図る。



3 取組の経過

4月～5月

- ・生徒の困難さ把握のための「学校生活アンケート」
- ・全教員による生徒アセスメント (サポート対象の見極め)
- ・コミュニケーションスキル学習 (1学年2回、2学年1回)
- ・宿泊研修における集団カウンセリング (1学年)

6月

- ・外部講師による「共生社会」に関する講話

7月

- ・性の講話の実施 (1学年、2学年)
- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・「ほっと」の実施

8月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)

10月

- ・コミュニケーションスキル学習 (1学年、2学年)
- ・性の講話 (3学年)
- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・「ほっと」の実施

11月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)
- ・スクールカウンセラーによる校内研修

12月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)

1月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)

2月

- ・個別カウンセリング (スクールカウンセラー)

4 取組の内容

1 外部講師による「共生社会」に関する講話の実施

(1) 日 時

平成 29 年 6 月 14 日（水）

(2) ねらい

共生社会に関する理解を深め、共生社会を造る意識を持つ。

(3) 対 象

全生徒

(4) 内 容

テーマ「心のバリアフリー～私たちにできること～」

- ・ ノーマライゼーションの考え方が成立した背景
- ・ 障がい者とは何か
- ・ 真の意味での障がい者の自立とは
- ・ ユニバーサルデザインという考え方



(5) 成 果

少し難しい内容だが講演会を実施して 2 年目ということもあり、生徒それぞれが講演内容について理解し、自分なりの考えを持つことができるようになってきた。

【生徒の感想から抜粋】

- ・ 「障がい者に会った時、何かしてあげようと思ってしまうのは自分が障がい者に対して高みに立っているということ」という話しを聞き、自分が無意識にそう思っていることを恥ずかしく感じました。
- ・ 目が見えないからとか、足が動かないから障害者ではなく、その人にとって段差とかが障害なんだという考え方を初めて知りました。求められていないことまでしてしまうことがないようによく考えて行動しなければならないと思いました。

2 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 北海道教育大学釧路校講師 戸田竜也氏）

(1) 日 時

平成 29 年 7 月 25 日（月）～現在

(2) ねらい

個別カウンセリングを通して、生徒の心の安定を図る。

(3) 対 象

全生徒（希望者に実施）

(4) 内 容

年間 6 回カウンセリングを希望する生徒を対象に、個別のカウンセリング、教員とのカンファレンスを行った。

(5) 成 果

個別カウンセリングを通して自分の気持ち・考えが整理でき、自己理解が深まった生徒がいた。また、事後のカンファレンスを通して、担任が生徒理解を深められるとともに、今後の指導方針を考える材料とすることができた。

4 取組の内容

3 コミュニケーションスキル学習

(1) 日時

4月～（計画に沿って実施）

(2) ねらい

- ・本音のふれあいと自他発見を通して、良好な人間関係を築く力を育てる。
- ・生涯を通じて、健康で主体的な生活を送る態度を育てる。

(3) 対象

全学年

(4) 内容

本校では3HP（Head Health Hart Program）と名付け、総合的な学習の時間に設定している。内容については年間計画を参照。具体例として2学年⑤自己理解、他者理解について記載する。

3HP年間計画

	1年生	2年生	3年生
4月	4月18日(木) 6h ① 緊張を解き、話せる人を増やす	4月26日(木) 6h ⑤ 自己理解、他者理解	
5月	5月9日(木) 6h ② コミュニケーションを学ぶ (非言語)		
6月			
7月	③ 性の講話(2時間) 「体と心と危機管理」	⑥ 性の講話(2時間) 「誕生学」	
8月	★ほっと(10分)	★ほっと(10分) 8月23日(木) 6h ⑦ 体力向上予(追加) (見学旅行に向けて)	
9月			
10月	10月31日(木) 6h ④ プラスのストローク ★ほっと(10分)		⑧ 性の講話(2時間) 「死を考える」
11月		★ほっと(10分)	
12月			

○リフレーミングの考え方を学習



「短所が書かれたカード」
裏返すと長所が書いてあり、カルタ形式でグループワーク



使用教材
株式会社アイアップ
「短所を長所に変えたいやき」

ペアになり、相手の短所を長所にリフレーミングする活動

リフレーミングとはどんな時に使える手法か

- ①モチベーションを上げたいとき
- ②自分に自信を付けたいとき
- ③苦手なタイプの人がいるとき

(5) 成果

- ・クラスの間人間関係上のトラブルが起きたときに、「リフレーミングの手法を使って考えてみる」という発言が生徒から出た。
- ・1学年の最初に行うワークが打ち解けるきっかけとなり、その後のクラス活動に繋がった。

【生徒の感想から抜粋】

- ・自分が落ち込んでいるときに使うと良いなと思った！
- ・友だちの相談相手になるときに使える！

4 取組の内容

4 「授業のユニバーサルデザイン化」についての校内研修会の実施

(1) 日 時

平成 29 年 11 月 27 日 (月)

(2) ねらい

ユニバーサルデザインの視点での授業の工夫について考え、授業実践に生かす。

(3) 対 象

全教員

(4) 講 師

北海道教育大学釧路校講師 戸田竜也氏

(5) 内 容

さまざまな認知特性の生徒がいる中で、どのような授業の工夫すれば全ての生徒にとって分かりやすい授業となるかについて、講師による模

ーワークで意見の共有を図るなどした。

(6) 成 果

全ての生徒にとって分かりやすい授業を教員全員で考えることにより、新たな考えが生まれた。また、普段あまり見ることのない他の教員の実践について交流することができ、良い機会となった。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

今年度の中途退学者は1名だった。一時期不登校傾向にあった生徒がいたが、仲間つくりの取組みやスクールカウンセラーによる個別カウンセリングにより解消された。

(2) その他の指標による評価

保健室への相談件数が増加した。[H28年度 12件、H29年度 59件]

日々の悩みに対し、内に抱えてしまう生徒が多かったが、自分から教員に相談できるようになってきた。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

年に2度実施し、結果については担任、学年団を中心に情報の共有に努めた。今後はより的確な分析について研修を深め、生徒指導の一助としていきたい。

(4) 生徒の変容した姿

- ・コミュニケーションスキル学習により、相手を思いやる関わりが増えてきた。
- ・不登校気味の生徒がいたが、スクールカウンセラーとの面談等を通して気持ちを立て直し、登校が安定した。

2 課題

- ・「ほっと」の結果によると、1回目と2回目の結果で2回目の得点が低い因子も見受けられた。生徒間の関係づくりの強化を年間通して継続していく必要がある。
- ・スクールカウンセラーとの面談について生徒への全体周知はしているが、ニーズのある生徒を拾い切れていない状況があることから、周知方法の工夫を図る必要がある。

3 次年度に向けて

- ・「ほっと」の結果をもとにコミュニケーションスキル学習の内容を再考し、課題の解消を目指す。
- ・スクールカウンセラーとの個別カウンセリングの周知方法を工夫し、カウンセリングを希望する生徒が希望を表明しやすい環境を作る。

北海道足寄高等学校

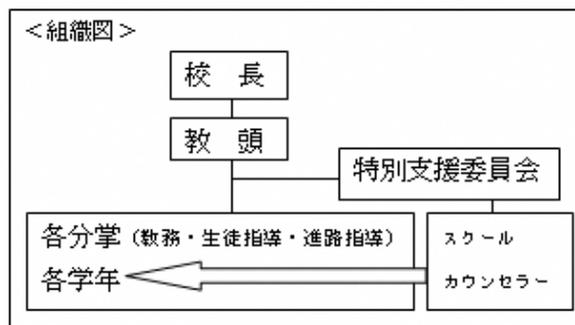
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 146名

1 取組の特徴

カナダ研修等の「異文化交流」、高齢者等との「異世代交流」、地域の小中学校との連携事業等での「異校種交流」など、コミュニケーションに必要なスキルを磨くための様々な取組を実施している。また、小規模校の特性を生かし、「全校教育相談」等を通して生徒の状況をきめ細かく把握し、援助希求しやすい雰囲気づくりを行っている。

2 取組のねらい

様々な交流経験を通して、「自分とは違う他者への寛容さ」、「人と人とのつながりの大切さ」、「他者への思いやりや配慮」等の望ましい人間関係形成能力を育成する。また、きめ細かく生徒の状況を把握し、いじめの未然防止や早期発見、援助希求の重要性に関する認識を高める。



3 取組の経過

【4月】

- ・ネイパル足寄職員による人間関係スキルアップトレーニングの実施 [1学年]
- ・「hyper-QU①」の実施 [全学年]

【5月】

- ・交通安全啓発運動でのドライバーへの街頭での呼びかけの実施 [2・3学年]
- ・保育園訪問①の実施 [3学年]

【6月】

- ・本別警察署員によるSNS等ネットトラブル及び非行防止講話・防犯訓練の実施 [全学年]
- ・足寄小学校2年生との交流 [全学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング①の実施 [1学年]

【7月】

- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング②の実施 [1学年]

【8月】

- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング③の実施 [1学年]

【9月】

- ・「全校教育相談①」の実施 [全学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング④⑤の実施 [1学年]
- ・カナダ研修 (ホームステイ体験・文化交流)の実施 [1学年]

【10月】

- ・全校教育相談に関わる校内研修① (事例研究・情報交換)の実施 [教職員]
- ・「高齢者や障がいを持つ方々との共生」に関する講演・学習の実施 [2学年]
- ・足寄中学校との連携による「カナダ研修報告会」の実施 [1学年]
- ・「hyper-QU②」の実施 [全学年]
- ・保育園訪問②の実施 [3学年]

【11月】

- ・高齢者等複合施設訪問の実施 [2学年]

【12月】

- ・見学旅行 (沖縄)での民泊・琉球文化体験の実施 [2学年]
- ・釧路高等技術専門学校教授 三島 利紀氏による「hyper-QU」に関わる校内研修の実施 [教職員]
- ・保育園訪問③の実施 [3学年]

【1月】

- ・「全校教育相談②」の実施 [全学年]
- ・全校教育相談に関わる校内研修② (事例研究・情報交換)の実施 [教職員]

【通年】

- ・足寄町福祉課派遣によるスクールカウンセラーの活用・連携 (月2回実施)

4 取組の内容

1 全校教育相談（年2回）の実施

- (1) **ねらい** 生徒の悩み等の整理や解決の糸口を見出すため、全教員による教育カウンセリングを行い、生徒の豊かな心の成長・発達を促すことをねらいとする。
- (2) **対象** 全校生徒
- (3) **内容** 生徒指導部の教育相談担当教員が、事前アンケートをもとに全教員を割り振り、全校生徒の面談を行う。教育相談実施後、全教員で情報を共有する事例や個別に対応する事例等、教育相談担当教員が結果を取りまとめ、教職員全体で「校内研修」を実施し、事例研究や情報交換を行っている。
- (4) **成果** 援助希求しやすい雰囲気が醸成され、小中学校からの固定化した人間関係の悩み等を話してくれる生徒が増加し、いじめの早期発見・未然防止に繋がっている。



2 高齢者等複合施設「むすびれっじ」訪問の実施

- (1) **ねらい** 高齢者や障がいのある方等の尊厳やさまざまな人々が共に支え合って生きることの重要性を認識し、家庭や地域及び社会の一員として主体的に行動することの意義について考える。
- (2) **対象** 2学年全生徒（平成29年度は47名参加）
- (3) **内容** 施設を訪問し、グループごとに入所者とゲームやホットケーキづくりなどを通して高齢者や障がいのある方々との交流を行う。
- (4) **生徒の感想** 高齢者の方と接することで学べることが多く、とても良い機会でした。自分のいつものような口調では高齢者の方が聞き取れなく、職員の方が耳元でゆっくりと話しかけていたのを見て、そのような配慮が必要なのだと分かりました。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) **欠席日数、いじめの認知件数の推移** ※数値の推移は「昨年度⇒今年度（1月末現在）」
 - ・全校生徒数が増え昨年度より欠席総日数は増加したが、1人当たりの日数は減少した。
 - ・2・3年生については、欠席総日数も減少している。いじめの認知件数も減っている。
[1人当たりの欠席総日数 4.05⇒3.70 現2年の欠席総日数 154⇒126]
[現3年の欠席総日数 291⇒137 いじめの認知件数 5 ⇒ 1]
- (2) **「hyper-QU」実施により把握した生徒のソーシャルスキル**
「配慮」「かわり」のスキルとも全国平均を上回り、4月から10月の変化についても微増ではあるが向上していることが読み取れる。
- (3) **生徒の変容した姿**
援助希求しやすい雰囲気が醸成され、保険室への相談件数が増加（7⇒37）している。

2 課題

中途退学者数、不登校生徒数、保健室利用者数の推移（平成29年11月末現在）

[中途退学者 昨年度 1名 ⇒今年度 3名]

[不登校者数 昨年度 1名 ⇒今年度 2名 ※中途退学者除く]

町外からの入学者数が昨年比3.25倍に増え、不登校経験入学者が増加している。教育相談等で生徒の状況を的確に把握し、人間関係構築のサポートをしていく必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 町外からの生徒や不登校経験のある生徒が増加する傾向は今後も続くと思われることから、足寄町派遣のSCと連携を図りながら、望ましい人間関係構築のサポートを行う。
- (2) 今年度より回数が増えた生徒面談の機会を効果的に活用し、生徒の自己理解の深化と自己肯定感の高揚に繋がるカウンセリングを行う。

北海道釧路明輝高等学校

課程：全日制
 学科：総合学科
 生徒数：597名

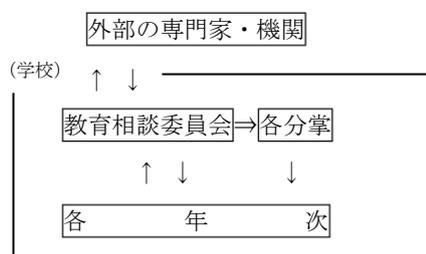
1 取組の特徴

生徒自身が自己理解及び他者理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を図るため、構成的グループエンカウンター (SGE) や集団カウンセリングなどのエクササイズを実施する。また、個別面談を重視し、年間に各年次複数回実施するとともに、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを実施し、きめ細かな生徒理解に努める。その際、「Q-Uテスト」や「ほっと」、「ほっとプラス」なども活用し、予防的な見地に立って生徒の小さな変化にも目を向けていく。さらに、生徒間はおもてなし生徒と教師との良好な人間関係を構築するとともに、学校やクラスに対する帰属意識を高めるため、教員の教育相談に関わるスキルアップを図ることをねらいとした研修会を実施している。

2 取組のねらい

一人一人の生徒を大切にする積極的な生徒指導を推進し、生徒の人間関係づくりのスキルアップや教職員の教育相談に関する指導力の向上を図ることで、全ての生徒の学校生活に対する満足度を高め、不登校やいじめの未然防止を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月～6月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報の収集
- ・宿泊研修におけるリレーションシップトレーニング(1年次)
- ・集団カウンセリング(2年次)
- ・個別面談による生徒の現状や家庭環境の把握及び学校生活における不安や悩み等の聞き取り(全年次)
- ・生徒情報の共有(教員間)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施
- ・Q-Uテストの実施(全年次)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(全年次)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

7月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・個人面談による学校祭前後における友人関係の変化や不安、悩み等の聞き取り(全年次)
- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

8～9月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- 10月
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
 - ・生きる力を育むプログラム(1、2年次)

11月

- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

12月～1月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストの実施(1、2年次)
- ・子ども理解支援ツール「ほっとプラス」実施(1、2年次)

2月～3月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・Q-Uテストの結果に基づく個人面談(1、2年次)
- ・集団カウンセリング(1年次)
- ・今年度の事業評価

4 取組の内容

1 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 宮尾 賢子氏）

- (1) 日 時 平成 29 年 6 月 12 日（月）～現在
- (2) ねらい 生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、満足度の高い生活を送ることができるよう支援する。
- (3) 対 象 希望生徒又は保護者
- (4) 内 容 ア 生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言
イ 生徒又は保護者へのカウンセリングの結果に係る教員への助言
- (5) 成 果 カウンセラーの助言により、生徒理解を深めるとともに、生徒個々に対する教員のカウンセリングのスキルアップを図ることができた。
- (6) 課 題 対象生徒をより効果的なタイミングでカウンセリングにつなげられるよう、日常的に生徒と積極的に関わり、教職員間で情報の共有をより密に図る必要がある。

2 集団カウンセリング（講師：本校教員）

- (1) 日 時 ①平成 29 年 4 月 13 日（木） ②平成 29 年 4 月 19 日（水）
- (2) ねらい 生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため年次毎に集団カウンセリングを実施し、人間関係づくりを支援する。
- (3) 対 象 ①1 年次生徒 ②2 年次生徒
- (4) 内 容 各年次の生徒に対する集団カウンセリング
- (5) 成 果 生徒は集団カウンセリングの実践を通して、自己理解を深めるとともに、他者理解のためのコミュニケーションの大切さを理解することができた。
- (6) 課 題 日常的に人間関係づくりを支援する必要があることから、継続した取組とする必要がある。

3 生きる力を育むプログラム（講師：各 HR 担任・副担任）

- (1) 日 時 平成 29 年 10 月 25 日（水）
- (2) ねらい 生徒の生きる力を育むため、生徒個々の援助希求的態度及びストレス対処スキルの育成を行う。
- (3) 対 象 1、2 年次生徒
- (4) 内 容 グループワークを中心に、「生きる力を育むプログラム」の内容について実施する。
- (5) 成 果 生徒の事後アンケートに「相手を思いやる必要性に気付いた。」「もっと人の気持ちに気付いてあげられるようになりたい。」などがあげられており、援助希求しやすい環境を養えた。
- (6) 課 題 イベント的なプログラムにせず、継続して働きかける必要がある。
各担任、副担任が講師を行うこととしたが、教員のスキルに依存する部分が大きく、今後も同様に行うためには教員の研修が必須である。

4 コミュニケーションスキルトレーニング

- (1) 日 時 週 1 回程度放課後を利用（通年）
- (2) ねらい 高校卒業後を念頭に、適切な人間関係を築くためのコミュニケーションスキルを養う。
- (3) 対 象 希望者
- (4) 内 容 場面分析、言葉の選択トレーニング及び市販のカードゲームを用いた傾聴トレーニング
- (5) 成 果 対人関係において相手の立場に立った見方ができるようになってきている。
- (6) 課 題 生徒の状況に合わせた課題選択を行うため、生徒理解のスキルが必要であり、担当者に依存する部分が大きいいため、教員のスキルトレーニングが必要である。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び転出者は毎年数人ずついるが、少ない人数で推移している。該当生徒についても、ホームルーム担任及び養護教諭等が相談を受ける中で、生徒の思いを汲み取ることができており、早期から学校の支援体制の中で指導を行うことができています。

(2) その他の指標による評価

スクールカウンセラーがほぼ毎年来校し、生徒との個別カウンセリングを実施するとともに、各年次における個別面談を行っている。しかし、年次によっては相談を目的として保健室へ来室する生徒が例年より多い人数となっている。

(3) 「ほっと」、「ほっとプラス」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

全体の「要素偏差値」は50.0以上あり、大きな変動もなく安定した数値であることから、集団として落ちついている本校生徒の実態を表しているといえる。「礼儀」の数値が高く、「緊張」の値が低いことから、安定した集団を維持することはできるが、自分の意見を主張したり相手を批判したりする等の、正面からぶつかり合うような人間関係を築くまでには至っていないと考えられる。

また、因子に注目すると、本校生徒は例年「関係維持」が高く、「仲間強化」が低い傾向がある。このことから、行事などで意見をぶつけ合うより、妥協して表面的には仲良くすることができるというような、意見や価値観の違いを受け入れて、より濃密な関係になることは苦手な傾向があると推測される。

しかし、学年が上がるにつれ、「仲間強化」の項目が段階的に増加する傾向が見られることから、学校生活の中で人間関係を深められていることが推測できた。

今後は、卒業後の進路に耐えうる力を身に付けるためにも、自己効力感や自己有用感を実生活の中で高め、もう一歩進んだ人間関係の構築が求められる。

(4) 生徒の変容した姿

今年度は例年の取組の他に、援助希求的態度を養うことを目的とした「生きる力を育むプログラム」を実施した。参加した生徒の事後アンケートには「相手を思いやる必要性に気付いた。」「もっと人の気持ちに気付いてあげられるようになりたい。」などが挙げられており、援助希求しやすい環境を養えたと考えられる。

2 課題

生徒が悩んでいても気付かないケースや、スクールカウンセラーによるカウンセリングにつながらないケースがまだ見受けられるので、生徒のいわゆる「小さなサイン」を見逃さない教職員の一層の意識改革が求められる。また、スクールカウンセラーの役割についても定期的に知らせ、気軽に相談できるような体制作りが必要である。

3 次年度に向けて

(1) 今年度は、スクールカウンセラーによるカウンセリングを非常に効果的に行うことができ、生徒の悩みに対応することができた。しかし、生徒の悩みそのものが大きく減ることは考えられないので、スクールカウンセラーに頼らない教育相談を組織的に行う必要がある。

(2) 「Q-Uテスト」については生徒の状態把握などに活用することができたが、「ほっと」及び「ほっとプラス」についてはより一層効果的な活用を図る。

(3) 本事業における取組と本校の教育活動の中核を占めるキャリア教育に係る取組や生徒指導及び特別支援教育に関する学校経営方針との融合を図り、本事業の終了後も継続的に積極的な生徒指導を推進するよう工夫する。

北海道厚岸翔洋高等学校

課程：全日制
 学科：普通科・海洋資源科
 生徒数：150名

1 取組の特徴

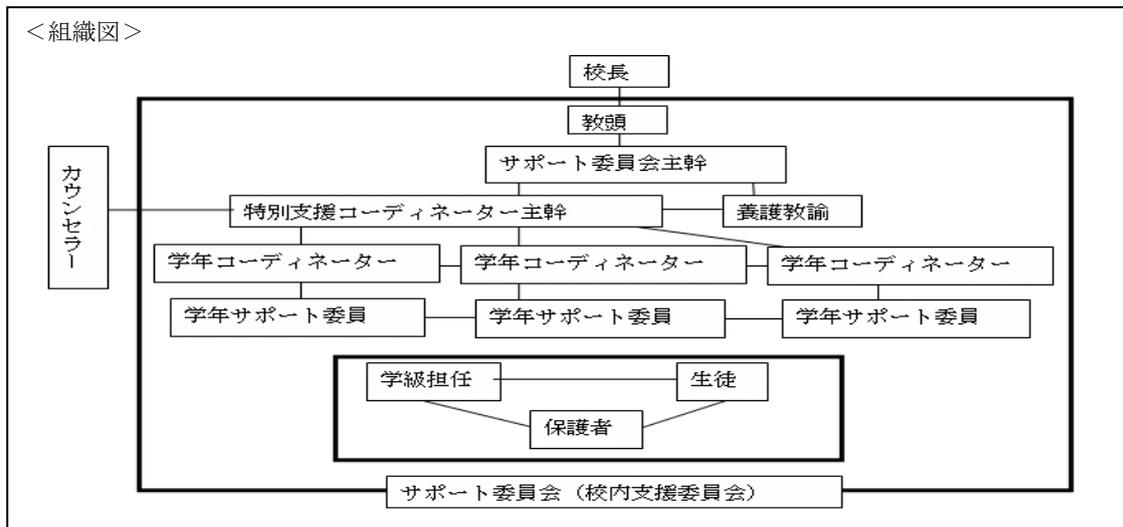
- 1 スクールカウンセラーと連携した生徒の困り感への対応
- 2 外部講師を活用した校内研修による教員の相談活動に対する理解促進
- 3 「hyper-QU」の活用によるきめ細かな生徒理解と生徒指導

これらの取組を通して教育相談の充実を図り、生徒の心身の健康の保持増進に努める。

2 取組のねらい

本校には、家庭事情などで情緒が安定しない生徒、特別な支援を必要とする生徒など様々な面で支援を必要とする生徒が多く在籍する。また、教育相談等で「消えてしまいたい」「何をしたいか分からない」といった言葉も目立つ。

こうした課題を踏まえ、スクールカウンセラーによる生徒への自殺予防を含めたカウンセリング、面談、授業参観、教員への助言を受けることで生徒の心身の健康の保持増進を目指す。また、教員が生徒のクラスでの立ち位置や状況を把握するため、hyper-QUを実施し、さらにhyper-QUの活用の充実のための校内研修を行い、学級経営や授業の充実に努める。



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学前の中学校訪問による生徒の情報収集と全職員による生徒の情報交換・共有 ・全職員による1学年を対象としたアンケート実施(サポート対象の見極め) ・宿泊研修時における仲間づくり支援(1学年) | <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校満足度アンケートの実施 ・第1回教育相談週間(生徒が面談したい教員を自由に指名できる) <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・hyper-QUの実施(1回目) <p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部講師による生徒理解のための研修(hyper-QUの実施) |
|--|---|

3 取組の経過

10月

- ・第2回教育相談週間(生徒が面談したい教員を自由に指名できる)
- ・生活習慣アンケートの実施

11月

- ・スクールカウンセラーによる対象生徒の授業観察、面談、カンファレンス

12月

- ・hyper-QUの実施(2回目)
- ・スクールカウンセラーによる対象生徒の授業観察、面談、カンファレンス

1月

- ・スクールカウンセラーによる対象生徒の面談、カンファレンス

2月

- ・第3回教育相談週間(生徒が面談したい教員を自由に指名できる)
- ・スクールカウンセラーによる対象生徒の面談、カンファレンス

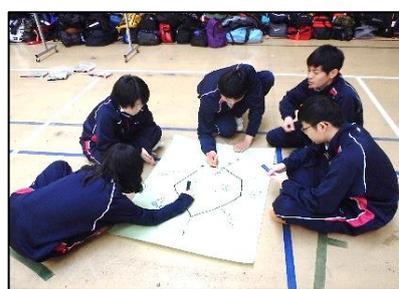
3月

- ・スクールカウンセラーによる対象生徒の面談、カンファレンス

4 取組の内容

1 宿泊研修における集団カウンセリング(グループエンカウンター)

- (1) 日時 平成29年4月20日(木)
- (2) 対象 1学年
- (3) ねらい グループエンカウンターを通して、生徒の相互理解と仲間づくり、学年としての良好な人間関係の構築を図る。
- (4) 内容 ネイパル厚岸のスタッフによる集団カウンセリング(グループエンカウンター)
- (5) 成果 生徒のクラスや学年への帰属意識が高まり、その後に続いたスポーツレクでは、クラスの団結力の強さが見えた。生徒の相互理解や集団づくりに効果があった。



【グループエンカウンターの様子】

2 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング&教員とのカンファレンス

- (1) 日時 随時
- (2) 対象 全生徒
- (3) 内容 カウンセリングを希望する生徒、気になる生徒を対象に個別カウンセリングを実施した。(継続カウンセリングの生徒も含む)
- (4) 成果 生徒は、スクールカウンセラーと話をすることで、自己理解を深める様子が見られた。また、教職員は事後のカンファレンスを通して生徒理解を深め、指導方法について助言をもらい、自己の実践を深く見直すことができた。

4 取組の内容

3 hyper-QUの実施

- (1) 日 時 平成 29 年 6 月 2 日 (金) 2 学年、平成 29 年 12 月 1 日 (金) 2 学年
平成 29 年 6 月 23 日 (金) 1 学年、平成 29 年 12 月 1 日 (金) 1 学年
- (2) 対 象 1、2 学年
- (3) ねらい 学級ごとに「生徒の満足度・意欲」や「生徒のソーシャルスキル」を把握し、学級経営を充実させる。
- (4) 成 果 6 月の結果をもとに教職員間での情報共有を図り、スクールカウンセラーの助言を参考にしながら教育相談に力を入れた。その結果、年度当初における不安感や学校生活への不満足感を解消することにつながった。

4 サポート委員会を組織

本校では取組の基軸をサポート委員会におき、外部との連携の主体となっている。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数は年々減少し、今年度は0名となっている。
 - ・【中途退学者】平成 27 年度：6 名 平成 28 年度：3 名 平成 29 年度：0 名
 - ・【不 登 校】平成 27 年度：1 名 平成 28 年度：1 名 平成 29 年度：0 名
- (2) 保健室へ相談に来る生徒数、特別指導を受ける生徒数が減少傾向となっている。
 - ・【保健室の相談者】平成 27 年度：190 名 平成 28 年度：114 名 平成 29 年度：14 名
 - ・【特別指導】平成 27 年度：6 件 8 名 平成 28 年度：2 件 6 名 平成 29 年度：2 件 5 名
- (3) hyper-QUの実施により、学級全体の生徒の様子を担当がより把握しやすくなった。また、効果的にhyper-QUを活用するため校内研修を実施し、要支援群の生徒を中心に面談を実施したり、不満足群にいる生徒へ役割を与えたりするなど、自尊心を高めるよう支援を行った。
- (4) スクールカウンセラーの助言により、生徒自身が自己理解を深め、積極的に行動する姿を見ることができた。
 - ・生徒会役員を中心に生徒会活動が活発に行われ、学校祭や体育大会などの各種行事も生徒主体の活動が増加した。
 - ・ボランティア部員が増加し、積極的にボランティアに努める生徒が増えた。
 - ・学習が遅れている生徒に対してクラスメイトが勉強を教えるなど、支え合う姿を見ることが増えた。

2 課題

- ・人間関係のトラブルや就学意志の喪失から進路変更をする生徒が一定数いることから、生徒理解を深めるための取組が必要である。
- ・コミュニケーションスキルが低い生徒や人間関係を上手に築けない生徒が一定数いることから、コミュニケーションスキル向上のための取組が必要である。
- ・自尊感情が低く、自分に自信のない生徒が多く在籍することから、自己有用感や自己肯定感を高める取組が必要である。

3 次年度に向けて

- ・生徒理解、生徒指導をより深め、教員の資質・能力を向上させるため、校内研修をさらに充実させる。
- ・一貫した生徒指導を行うため、教職員の情報共有を深める。
- ・生徒自身が自己理解を深め自己肯定感を高められるよう、充実した教育相談を継続する。
- ・「ほっと」や「アセス」の実施後の活用について研究する。

北海道標茶高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 214名

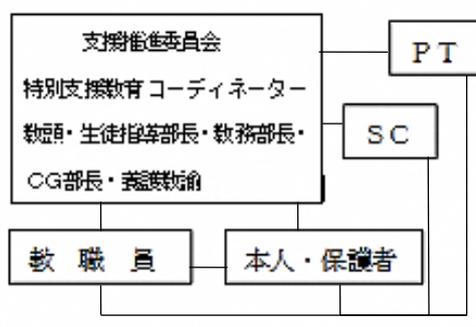
1 取組の特徴

- ・ピア・サポート活動による生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感の向上と良好な人間関係の構築
- ・「ほっと」の活用と教育相談週間を通じた、きめ細かな生徒理解と生徒対応
- ・SCとの連携による生徒の困り感への対応と校内研修による教員の相談活動の理解促進

2 取組のねらい

本校は、生活面や学習面で問題を抱えたまま入学してくる生徒が多く、入学後学校に適応できず、不登校や別室登校を余儀なくされる場合がある。こうした課題を踏まえ、本事業を活用し、スクールカウンセラーの援助や指導を受け、自己肯定感を高める取組を行い、コミュニケーションスキルの向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

通年

- ・ピア・サポート養成講座 (月1回)
- ・SCによる個別カウンセリング

4月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報収集と全職員による生徒の情報交換及び共有
- ・宿泊研修時における仲間作り支援 (1年次)

5月

- ・「ほっと」の実施① (全学年)
- ・教育相談週間① (全学年)
- ・釧路養護学校交流学習会 (花の苗植え等)

8月

- ・「ほっと」の実施② (全学年)
- ・高齢者施設訪問 (夏祭りボランティア)

8月～1月

- ・小学校との交流学習 (食育プロジェクト)

9月

- ・教育相談週間② (全学年)
- ・釧路養護学校交流学習会 (野菜収穫等)
- ・小学校との交流学習 (環境学習会)
- ・生徒理解のための校内研修 (SC講話、演習及び「ほっと」の見立て)

11月

- ・生徒主体のピア・サポート授業 (1年次)

2月

- ・SCによるストレスマネジメントの授業 (1年次)

- ・「ほっと」の実施③ (全学年)

3月

- ・教育相談週間③ (希望者)

4 取組の内容

1 生徒主体のピア・サポートの取組

(1) ねらい

- ・様々な支援スキル演習を通して、互いに思いやる気持ちを持ち、それを実践する雰囲気を作り出すことにより、豊かな人間関係を構築できるようにする。
- ・ピア・サポート養成講座を受けたピア・サポーターが主体となり講座や授業を行うことで、自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を目指す。

(2) 内容

- ・SCである宮尾賢子氏の協力のもと、放課後、ピア・サポート養成講座を実施。
- ・講座を受けた生徒による他生徒へのピア・サポート講座や授業を実施。

(3) 成果等

本校は、ピア・サポートを取り入れて3年目となる。今年度は、昨年度ピア・サポート養成講座を受講し、ピア・サポーターとして認証した6名の生徒及び生徒会が中心となり、演習を行った。また、今年度講座を受講している1年次生が他の1年次生へピア・サポートについて理解を深める講義を行った。自分たちが体験した演習を実際に行うことで、ピア・サポートについて理解し関心を示す生徒が増えた。ピア・サポーター達も自信と誇りを持ち、他の生徒と接し、自己肯定感が向上した。生徒の感想からは、「今日は知らない先輩のことを知り、更に仲良くなれたのでまた来てみたいと思った。」「今日の授業をしてくれたピア・サポーターが凄いなと思った。」というように、異年次との交流を通して仲良くなれるところや、サポーターが活躍できる場所もこのピア・サポート活動の良いところであると考えている。



●お絵かきしりとりを進行するサポーター



●動物あての説明をする生徒会

2 「ほっと」の実施

(1) ねらい

「ほっと」の結果を基に生徒理解を深めるとともに、生徒面談を通して早期の実態把握を行い、学級集団や個々の生徒へのアプローチ方法を検討する。

(2) 内容

- ・「ほっと」の分析と対策についての研修。教員同士のシェアリング。
- ・年3回の「ほっと」の実施（5月・8月・2月）
- ・「ほっと」の結果を活用した教育相談の実施
- ・SCによる生徒理解のための職員研修（9月8日実施）

(3) 成果等

- ・「ほっと」について研修を行い、生徒のコミュニケーションスキルの状況を把握し、SCの助言により、生徒が持つ課題に対しての支援方法や対応策について理解を深めることができた。
- ・生徒の変容について、「ほっと」のデータを基に理解を深め、成果の検証に役立てることができた。

4 取組の内容

3 SCとの連携による生徒の困り感への対応

(1) ねらい

生徒の困り感を解消し、安心して学校生活を送ることができるよう支援する。

(2) 内容

- ・ SCによる生徒及び保護者へのカウンセリング
- ・ SCによる生徒及び保護者へのカウンセリング結果に係わる教員への助言及び援助

(3) 成果等

カウンセリングを受けた生徒の感想から、「一番遠くて一番信頼できる人。身近な人には話しにくいことでも、時々来てくれる立場の方だからこそ話せることがある」「話を聞いてもらううちに自分の気持ちが整理できすごくすっきりした」などの声が聞かれた。また、SCと教員との中で生徒の情報交換を行い、今後の対応策が見え、生徒の困り感解消につながっている。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・ 中途退学者：平成28年度 5名 → 平成29年度 6名
- ・ 不登校生徒数：平成28年度 0名 → 平成29年度 5名

(2) その他の指標による評価

保健室利用統計より、利用する生徒が増加し、中でも相談件数が増加した。特にカウンセリングが必要な生徒が、自ら相談に来たり、友達に付き添われて来室したり（ピア・サポート）する等の援助希求が見受けられた。そのような生徒にはSCの協力を得ながら、不安を解消し安定した学校生活を送る事ができるように生徒の声に耳を傾けている。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

年3回（5月・8月・2月）実施し、クラス及び個人ごとの特徴と課題についての対策を検討している。学年別に見ると、1年次生の特徴は、13要素のうち「配慮」・「遵守」の項目が高く、「拒否」「忠告」の項目の偏差値が低い傾向にある。2年次生については、「表明」「緊張」の偏差値が低い傾向にある。全体的に、相手への配慮や援助ができるものの、自分の意見や欲求を主張できない生徒や、緊張しやすく自分がだせない生徒がいることが確認できる。3年次生については、概ね平均値より高い傾向にあり、特に中でも「配慮」「遵守」「緊張」が高い。経時比較すると、全年次において、5月当初と比べわずかではあるが、全ての項目の向上が見られる。特に3年次生については、1年次と2年次当初の偏差値と比較すると、全ての項目の上昇が見られた。様々な活動を通して人と関わり、3年かけてコミュニケーションスキルがバランス良く身に付いていることが確認できる。

(4) 生徒の変容した姿

- ・ 地域連携や異校種と連携した行事やボランティア活動において、ピア・サポートトレーニングなどで身に付けたコミュニケーションスキルを生かし、他者と積極的に関わる生徒が増えている。
- ・ ピア・サポート活動を通して、生徒の良好な人間関係の構築を図れている。また、ピア・サポーターが他の生徒に講義を行うことで自己肯定感が向上し、自信につながっている。

2 課題

- ・ ピア・サポーター養成講座受講後のサポート活動の場面の充実を図っていく必要がある。
- ・ 「ほっと」を更に効果的に活用するため、教育カウンセリングICT事業を利用する必要がある。

3 次年度に向けて

- ・ ピア・サポートについては、プランニング→活動→スーパービジョンの定着を図る。
- ・ 「ほっと」については、全教職員が活用できるようにする。

北海道弟子屈高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 124名

1 取組の特徴

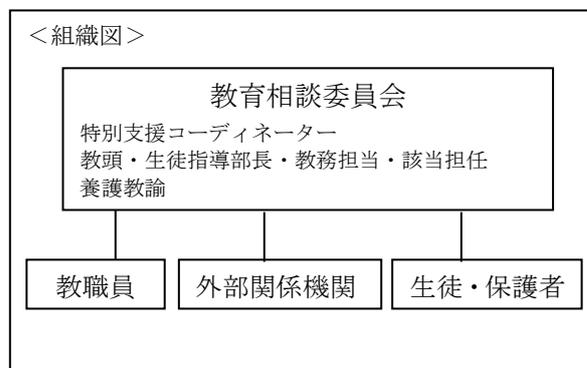
○ 教育相談の充実

- ・教育相談委員会を定期的に行き、生徒の情報交換を行う。
- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリング、全教職員による全校生徒を対象とした教育相談を実施する。
- ・外部の専門家を講師に招き、教育相談に関する校内研修を実施し、生徒理解を深める。

2 取組のねらい

本校には、人との関係を築くことが苦手な生徒や、自分の気持ちを他者に伝えることが苦手な生徒が多い。本事業を通じて、自分を大切にするとともに、他者を大切にできる生徒を育成し、生徒一人一人が安心して学校生活を送ることができるよう、教育相談体制の構築を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月

- ・中学校訪問による、新入生の情報収集
- ・全教職員での生徒情報の交換及び共有
- ・宿泊研修における集団カウンセリング (1学年)

6～7月

- ・全校面談 (全学年)

7～2月

- ・SCによる個別カウンセリング

10月

- ・SCによる心の授業 (1学年)

12月

- ・SCによる校内研修

1月

- ・「ほっと」の実施 (全学年)

2月

- ・全校面談 (全学年)

4 取組の内容

1 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング及び教員との情報交換

(1) 対象 全学年

(2) ねらい 生徒自身が自己の抱える問題に向き合い、不安を解決する方策を考える。また、教員は生徒が安心して学校生活を送ることができるよう支援する。

(3) 内容 カウンセリングを希望する生徒を対象に、個別のカウンセリングを実施する。その後、教員とのカンファレンスを実施する。

(4) 成果 生徒は、落ち着いた環境でスクールカウンセラーと話をすることで、自己理解を深めるとともに、自己が抱える悩みを整理するきっかけとなった。

教員は、スクールカウンセラーから情報提供を受けることで、多面的に生徒を理解することができた。

4 取組の内容

2 宿泊研修における集団カウンセリング（グループエンカウンター）

- (1) 日 時 平成 29 年 4 月 24 日
- (2) 対 象 1 学年
- (3) ねらい グループエンカウンターを通して、生徒の相互理解と仲間づくりを進め、学年として良好な人間関係を構築する。
- (4) 内 容 ネイパル北見の職員による集団カウンセリング（グループエンカウンター）
- (5) 成 果 はじめは、コミュニケーションをとることが苦手な生徒や弟子屈町外からの入学生が戸惑う場面も見られたが、各種エクササイズを行うことで、互いに新たな一面を知り、他者理解及び集団づくりに効果があった。



3 全校面談の実施

- (1) 日 時 平成 29 年 6 ～ 7 月、平成 30 年 1 ～ 2 月
- (2) 対 象 全学年
- (3) ねらい 面談を通して、教員が生徒の学校生活の様子を把握するとともに、生徒が教員に相談しやすい関係を構築する。
- (4) 内 容 生徒が面談する教員を指名する。指名された教員は、休み時間や放課後の時間を利用し、生徒と個別の面談を実施する。
- (5) 成 果 指導ではなく、教員が生徒の話に耳を傾けることに重きをおいて実施した。生徒からは、教員が自分のことを気にかけてくれるという実感が得られ、困った時に話がしやすくなったとの感想があった。

4 スクールカウンセラーによる心の授業

- (1) 日 時 平成 29 年 10 月 10 日
- (2) 対 象 1 学年
- (3) ねらい ストレスに適切に対処する力を身に付けさせることにより、問題発生の予防や学校生活の充実を図る。
- (4) 内 容 ストレスマネジメント（望ましい対処法）の講義及び演習。
- (5) 成 果 ストレスの受け止め方や望ましいストレスの対処方法について学び、予防と対策として、自己理解とセルフコントロールの大切さを理解することができた。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者：平成 27 年度 2 名、平成 28 年度 0 名、平成 29 年度 0 名
- ・不登校生徒数：平成 27 年度 0 名、平成 28 年度 1 名、平成 29 年度 0 名

(2) その他の指標による評価

保健室利用統計より、保健室来室者については、昨年度より増加している。家庭環境が複雑な生徒や精神的に不安定な生徒の来室が多く、「自分の気持ちを整理する場所」「ちょっと一息つける場所」として生徒は活用している。生徒が話をしたい時に、落ち着いて話せる場として保健室が機能していると考えられる。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・自分の行動や気持ちを調整することについて、苦手さを感じている。
- ・相手への配慮はできているが、自分の気持ちを表現することが苦手である。そのため、アサーションなどの取組が必要である。
- ・互いに高め合いながら、良い関係を維持できるよう、コミュニケーションスキルの向上が必要である。

(4) 生徒の変容した姿

- ・1年生は、宿泊研修でグループエンカウンターを実施したことにより、生徒の相互理解が図られた。
- ・スクールカウンセラーによる個別の面談や心の授業、教員による全校面談等の生徒理解を深める取組により、生徒が教員に対して対話を求める場面が増えた。

2 課題

- (1) 今年度、生徒理解のためのアセスメントとして「ほっと」を活用したが、結果をより効果的に活用するために、教育カウンセリング ICT活用事業を利用し、専門家からの助言をいただき生徒のサポートに還元していく必要がある。
- (2) 年度途中よりステッププログラムをスタートしたため、LHR計画に組み込んで活動することが難しかった。
- (3) 他者に自分の思いを伝えることが苦手な生徒や、援助希求が苦手な生徒が多いことから、恥ずかしさ等の心理的負担をあまりかけないように配慮しながら、「わからないことを聞く」「自己開示する」ことに慣れさせ、徐々に生徒同士で話し合うことや教え合うことができるよう、段階的に指導する必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 生徒にコミュニケーション能力を身に付けさせるための指導や支援方法等について、校内研修を実施する。また、教育カウンセリング ICT活用事業を利用し、専門家から助言を得ながら教育相談の充実に努める。
- (2) 日々の生徒の観察や、「ほっと」「Q-U」等の心理アセスメントの結果を活用しながら生徒理解をより深めていく。
- (3) 生徒自身が、自己有用感を持つとともに、他者を大切にできる言動ができるような取組を行う。

北海道白糠高等学校

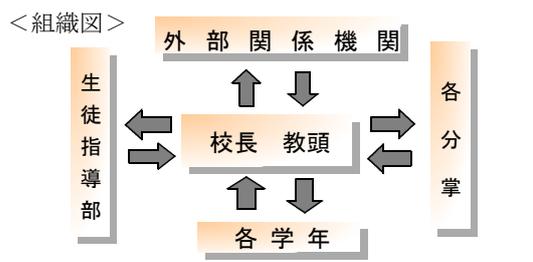
課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 100名

1 取組の特徴

外部機関やスクールカウンセラー等と連携し、コミュニケーション能力を高めるための取組を行い、地域の協力のもと培ったコミュニケーションスキルを活用する学習を積極的に行う。

2 取組のねらい

本校には学習面や生活面で課題を抱える生徒が入学し、種々の事情から第1学年の途中で進路を変更するケースが少なからずある。こうした課題を踏まえ、本事業を通してコミュニケーション能力や自己表現力の育成を目指した学習内容を工夫し、また、個別面談等を継続して行うことで、高校生活の充実を図る。



3 取組の経過

- | | | |
|----|-------------------------------|---|
| 4月 | ・中学校訪問による生徒情報の共有 | ・幼稚園児との交流Ⅰ（2学年） |
| 5月 | ・第1回目「Q-U」の実施、分析 | ・白糠養護学校との交流Ⅱ（3学年） |
| 6月 | ・地域町内会との合同清掃（生徒会） | ・SCによるピア・サポートの授業Ⅰ（1、2学年） |
| | ・「Q-U」についての校内研修会の開催 | ・地域町内会との合同避難訓練の実施 |
| | ・「Q-U」を活用した個別面談の実施 | ・SCによるピアサポートの授業Ⅱ（1学年） |
| | ・SCによるこころの授業（1、2学年） | ・幼稚園児との交流Ⅱ（2学年） |
| | ・赤ちゃん交流Ⅰ・Ⅱ（2学年） | ・地域町内会、保護者とのそば打ち体験 |
| | ・花壇栽植（地域住民と生徒会） | ・宿泊研修（1学年） |
| 7月 | ・交通安全街頭啓発（生徒会） | ・第2回目「Q-U」の実施、分析 |
| | ・高齢者との交流（3学年） | ・「Q-U」を活用した個別面談の実施 |
| 9月 | ・学校祭を通してコミュニケーション力を向上させる取組の実施 | 5月～3月 |
| | ・白糠養護学校との交流Ⅰ（3学年） | ・スクールカウンセラー（SC）による個別のカウンセリングの実施、および教員とのカンファレンスの実施 |
| | ・「ほっと」の実施（1学年） | |
| | ・「ほっと」を活用した個別面談の実施 | |

4 取組の内容

1 スクールカウンセラー（SC）による授業「ピア・サポートについて学ぼう！」

（講師：公立学校スクールカウンセラー 佐々木 啓子 氏）

- (1) 対象 第1学年（9月と10月の2回実施）
- (2) ねらい ピア・サポートを通して自分自身を見つめ直すとともに、緊張をほぐしたよりよい人間関係づくりについて学ぶ。
- (3) 内容 「カタルト」 「お絵かきしりとり」などを活用したコミュニケーションゲームやグループ学習。
- (4) 成果 授業後のアンケートでは「ちょっとしたことでも言葉にしなければ伝わらないことを改めて感じた」「グループでの学習が楽しかった」「自分のことが分かったり、友達のことを分かったりして良かった」等の感想が寄せられた。



2 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング及び教員とのカンファレンス

(北海道教育大学大学院教授 臨床心理士 安川 禎亮 氏)

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 生徒が自己の抱える問題を明確にし、自己理解を深め、自己肯定感を高めさせる。
- (3) 内容 カウンセリングを希望する生徒（継続カウンセリングの生徒も含む）を対象に個別カウンセリングを実施し、その後、教員とのカンファレンスを実施した。
- (4) 成果 カウンセリングを受けた生徒の感想から、スクールカウンセラーに話をじっくり聴いてもらうことで、自己に対する理解が深まっていったことが確認できた。また、事後のカンファレンスを通して、教員も生徒理解をより深めることができた。

3 宿泊研修における集団カウンセリング（コミュニケーショントレーニング）の実施

(講師：ネイパルあしよろ 菅原 氏)



- (1) 対象 第1学年
- (2) ねらい コミュニケーショントレーニングを通して、生徒の相互理解と仲間づくり及び学年としての良好な人間関係の構築を図る。
- (3) 内容 ネイパルあしよろのスタッフによる、コミュニケーショントレーニングの実施。
- (4) 成果 生徒の感想から、学級への帰属意識が高まり、生徒同士の相互理解が進み、安心して自分を表現できるようになったことが確認できた。

5 次年度に向けて

《写真》幼稚園児との交流より→

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
第1学年において、中途退学者数が減少傾向にある。
※平成26年度10名→27年度12名→28年度2名→29年度1名
- (2) その他の指標による評価
ボランティアに参加する生徒数（のべ人数）の割合が年々増加している。
※平成27年度55.6% →28年度93.6% →29年度108.0%
- (3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概要
9月に1学年で実施した「ほっと」では、コミュニケーションスキル13要素のうち「緊張」のスキルに課題があることが分かり、それらの解消に向けた取組を実施した。
- (4) 生徒の変容した姿
 - ・本校で実施している、赤ちゃん、幼稚園、養護学校高等部、高齢者との交流事業の中で積極的に関わる生徒の姿が多く見られるようになった。
 - ・夏休み前に、校舎前道路沿いの花壇の草取りを、3学年が積極的に実施した。



2 課題

- ・スクールカウンセラーによる個別カウンセリングを希望する生徒が多いこと、またスクールカウンセラーによる授業が非常に効果的であることから、次年度以降もスクールカウンセラーの継続的な支援が必要である。
- ・Q-U及び「ほっと」を効果的に活用するために、研修会を継続的に開催する必要がある。

3 次年度に向けて

- ・スクールカウンセラーの授業を受ける学年を拡大させたい。
- ・「Q-U」及び「ほっと」を効果的に活用するための校内研修会を開催する。
- ・今年度と同様に「Q-U」及び「ほっと」で実態を把握した後に、個別面談の時間を確保していく。

北海道根室高等学校

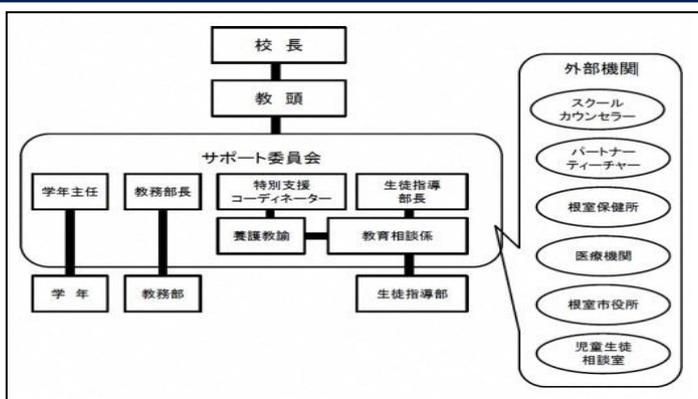
課程： 全日制
 学科： 普通科・商業科・事務情報科
 生徒数： 539名

1 取組の特徴

- 1 全教職員でアセスメントを活用し、生徒の個々の状況を把握した上で、学習や生活、進路に関する教育相談を行っている。
- 2 行事等の様々な場面を利用し、人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成をねらいとした取組を行っている。
- 3 誰かの支えになることで自分も支えられるなど、互いを尊重し合いながら共に命を大切にしようとする態度を育む「いのちの授業」を行っている。

2 取組のねらい

- 1 生徒が相談しやすい環境づくりに努め、教職員の意識やスキルの向上を目的とした校内研修の充実を図る。
- 2 外部機関との連携を密にし、専門家からの助言や支援を受けることのできる、生徒の支援体制づくりを進める。



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月 宿泊研修 *1年次生
・学び合いタイム等</p> <p>5月 諸検査の実施 *1年次生、2年生
・hyper-QUテスト
・「ほっと」</p> <p>6月 「いのちの授業」① *1年次生
・心の健康問題(保健の授業にて実施)</p> <p>6月 スクールカウンセラー活用
・個別カウンセリング
(3月まで月1回実施)</p> | <p>7月 面談週間 *全学年</p> <p>10月 「いのちの授業」② *1年次生
・「傾聴」</p> <p>10月 諸検査の実施 *1年次生、2年生
・hyper-QUテスト
・「ほっと」及び「ほっとプラス」</p> <p>11月 「いのちの授業」③ *1年次生
・「カウンセリング、ストレスマネジメントに関する講演」(講師:SC)</p> <p>1月 「ほっとプラス」 *1年次生</p> |
|--|---|

4 取組の内容

1 宿泊研修での取組

- (1) ねらい 人間関係を構築する機会とし、他者を理解し、尊重し合うコミュニケーション能力を育成する。
- (2) 対象 1年次生
- (3) 内容
 - ①学び合いタイム・・・部屋ごとに出された課題に取り組み、成果を競うゲーム (ひのき屋ライブの様子)
 - ②ひのき屋ライブ・・・フォークダンスや手拍子、合いの手などで積極的に演奏に参加し、仲間との絆を深める芸術鑑賞
- (4) 成果 楽しみながら取り組む活動を通して、コミュニケーションの方法の一つとして他者との温かい人間関係を築くことの大切さを理解した。



4 取組の内容

2 スクールカウンセラーの活用

- (1) **ねらい** 教育相談担当教員との連携を図り、個に応じた継続的な支援を行う。
- (2) **対象** 全学年
- (3) **内容** ①個別のカウンセリング（生徒及び保護者）
②講演会
③教員とのコンサルテーション及び校内研修
- (4) **成果** カウンセリングやストレスマネジメントに関する講演を行うことで、生徒のカウンセリングについての理解を深めることができた。また、コンサルテーションを通して、今後どのような支援を行うべきか、また、関係機関とどのように連携すべきか、支援体制づくりの方向性を明確にすることができた。

3 「いのちの授業」

- (1) **ねらい** 様々な心の健康問題について理解するとともに、ストレスマネジメント能力やコミュニケーション能力を高め、他者に援助を求める態度やストレスを適切に受け止めるスキルを身に付ける。
- (2) **対象** 1年次生
- (3) **内容** ①早期の問題認識・・・保健の授業「心の健康問題」
②ストレス対処スキルの育成・・・講演と演習
③援助希求的態度の育成・・・「傾聴」の授業
- (4) **成果** スマートフォン等によるコミュニケーションだけでなく、相手の気持ちをより感じ取ることができる直接対話の重要性を理解した。また、授業や講演、演習を通して、生徒のストレス対処スキルや援助希求的態度を育成することができた。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) **中途退学者数及び不登校生徒数の推移**
例年と比べ、大きな変化はない。
- (2) **その他の指標による評価**
面談週間を利用して、より具体的な学習の支援や進路への助言を行った。また、生徒の学習や進路活動の進展状況等に合わせ、期間外でも、面談を複数回実施した。
- (3) **「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況**
「援助要請」がしやすい人間関係を構築するため、対話によるコミュニケーションを大切にしていけるよう継続して指導する。
- (4) **生徒の変容した姿**
「傾聴」の授業を通して、コミュニケーションの大切さを改めて感じ、仲間の声に耳を傾けたいという感想を持つ生徒が多く見られた。今後も継続して実施する必要がある。

2 課題

人間関係形成能力やコミュニケーション能力を育成するために、3年間の見通しをもって計画的で継続的な取組が必要である。

3 次年度に向けて

共通理解を図りながら、本校の目指す生徒像を意識した取組となるよう計画する。